東京薬科大学新聞

発行所 東京薬科大学学生新聞

号外

教務、分科問題特集号

十一月十日、五時より図書館棟の第一会議室において、教務問題に関する懇談会が開かれた。今、学生の関心の的である分科問題についても、このとき話し合われた。教授側の出席者は次の通り。

〈教務担当〉
教務部長　高田教授
教務担当主任　高村教授
〃　副主任　斉田教授
〈学生担当〉
学生部長　森教授
学生担当主任　酒井教授
〈教務課〉
教務課長　吉原氏

（分科問題に関しては高田・森教授は分科問題検討委員会の委員として発言した。）

学生側の出席者は二十数名で二年生の出席が多かった。

今回の懇談会は、前回（七月）の懇談会で出席の悪かった三、四年生を対象にしたもので、

①進級基準及び再試験（バリヤー制度）
②講義科目の内容及び評価
③実習とその内容（試験その他）
④教室・クラス規模・授業環境
⑤卒論配属
⑥卒論活動・Bコースの特論・等

に対する意見聴取であった。しかし、十月三十日発行の学内報で分科と履修内容の改訂について五十八年度からの実施を目指すという大学側の意向が明らかにされ、十日昼休みに、学長から主に二年生を対象に説明がなされたところ、学生の反響が大きかったため、それに応えて執行委員会が大学側に対し、分科についての話し合いを要請したため大学側も必要を感じ、これを受諾した。

懇談会は、高田教務部長による近年の状況も含めた簡単な挨拶から始まった。その内容は、バリヤー制度により女子においては、その効果が表われ減少の傾向にあるが、男子においては、かなりの留年者が出た。このことを深刻に受けとめており、科目によるアンバランス、休講が多いなどの悪状件を改善していきたい。というものだった。

このあと、斉田教授の司会で、学生側からの質問、要望に対して大学側が解答するという形式で行われた。質問が多数で、重複したものもあるので、多少まとめて書いてみたい。

Q1 バリヤー制度の実施によって、一、二年の授業環境が悪化しているが、それについてなんらかの対処をしてもらいたい。

A1 一時はクラスの増設も考えたが、窮屈ではあるが、入れないこともないので、このままで良いのではないか。また、現在のような状況は長く続かないと思われる。（昨年度及び今年度は、入学時に国公立や他私立大学に流れる人が少なかったため、入学者数が増加してしまった。大学側は、このようなことは今後あるとは思えないため、現状は長く続かないという判断をしたわけだが、一、二年の現状を改善するような対策はなんらかの解答の中にはない。また、授業環境に関しては教室に入れればよいというものではない。）

Q2 二年次の語学のニクラス授業はもらいたい。

A2 来年度に一クラス授業にすることを検討中である。

Q3 基礎科目と専門科目のつながりがはっきりしていない。知っていた方が勉強しやすいのではないか。また、講義の存在の意味もわからないものがある。

A3 学校としても講義の選択を考えている。

Q4 次回の講義の内容を（講義の終わりにでも）言ってほしい。予習など非常にやりにくい。

A4 教授側にそうするように伝える。（この問題に関しては有機、薬理などは個の科目が学生側からあげられた。しかし実際は、もっと多いと思われる。）

Q5 講義と実習の関連性が内容的にも時期的にも薄いのでは。たとえば、動物実習や植物実習は二年次にあるが、講義は一年次にある。また、微生物学のように講義と実習が同学年にあっても時期的に大きなずれがある。また、講義と実習でやる内容が一致しないものもある。

A5 実習と講義を同時期に行うことは理想的なことであるが、実習室の数の関係や、学年全クラスが一緒に実習を行うことが不可能なことなどから、やむを得ず現在のような状況となっている。また植物実習に関しては一年次に実施することを検討中である。また、実習と講義両方で、内容を満たすことになっているので、多少重ならないこともある。

Q6 マイクを使用しない教授がいるが、後の席は聞こえないので必ず使用してほしい。また、使用しても、よく聞き取れない教授もいるので積極的な対応を望みたい。

A6 各教授にそのように伝達する。また、故障などのあるときには、早期に修理するように努力している。（実際、一二七、一二八教室のマイク装置は修理されたが、これらの教室は反響がひどく非常に聞き取りにくい。との指摘があった。）

Q7 同じ試験であるのに採点者によって著しく点数のつけ方が違う教科があり、また、採点に教授の主観がはいり、採点の基準が不明確で一定でない科目がある。この様な形では合否を決定されるのは、納得できない。

A7 本来、試験の採点は、問題を作った教授によってなされるべきである。事実であるなら由々しきことなので、該当教科に関してはそのように伝える。

Q8 進級基準の高すぎる科目があるのではないか。落第者が多い講義は、よい講義であるとは言えないと思うのだが。

A8 教師の方にも問題があると思われるので、合否のアンバランスを取り除くように努力する。

Q9 実習の時、試薬を取るのに列を作ってならばならないような現状をなんとかしてほしい。

A1 と同様の解答である。

Q10 試験が9月である現状では、夏休みが間に入り、夏バテで体調をくずしている人も多い時期であるし、また各講義

（この問題に関しては学生側から科目名が明らかにされた）

の印象も薄れていて試験を受けるのによい状態とは言えないのではないか。できるなら夏休み前の7月にもってほしい。

A10 現在教授会でも検討中ではやければ再来年度に実施されるかもしれない。

Q11 同じ入試を受けて入学したのに、頭文字の順番で教授が割り当てられるのは、おかしい。講義内容が違うのに、卒試は同じものを受けなければならない。学生側に教授を選択する権利があるはずである。

A11 選択できる形でもっていきたい。

Q12 社会と薬学のかわり合いを伝えてほしい。四年次でなくとも、就職、その他のことは非常に気になることである。

A12 各アドバイザーに行ってもらうなど、何らかの形で実現したい。

Q13 三年次に行う教室回りの期間を長くしてほしい。十分な説明を受けないまま卒業は希望を出し辛い。

A13 教室説明を早く、説明の幅を広げ、また週間の説明会が全て終了するまでは学生が教室に訪問することをおさえる。配属を年内には決定したい。

Q14 四年次のBコースだけに特論が義務づけられるのはなぜか。

A14 当初のBコース特論開設の目的は、Aコースとのアンバランスの解消と、Bコースの学生を授業につなぎとめることと文献を調べることにより広い知識を持った薬学生を作ることが目的であった。Bコース特論により国家試験の合格率が伸びていることは事実であり、以前、柏板舎時代にも東洋医学などの講義を会社からエキスパートを集めたりして行なったが、学生が集まらず失敗に終った。現在のような国家試験対策の講義の形をとっている。しかし、学生側からの内容に対する要請があれば、本来の主旨に沿った講義を開設する意志はあり、むしろ望ましい。

Q15 Bコースの単位修得はどのようにすればいいのか。

A15 出席状況とレポートの結果で判定する。やむを得ず欠席する場合には、担当教授の承諾を得なければならないことになっている。

他に学生の意見として幾つか出たので、それも付記する。

①半期で終了する科目で内容の密度が濃すぎて、学生が理解するまでに至らないものがある。

②薬学英語の講義を受講したいにもかかわらず、土曜の三限にあるために、他科目と重なり、受講できない人が多数いる。時間を移動してもらいたい。

③独語が二年間あるのだから、文法を一年間で過密にやらないで、二年間で終了するようにしてはどうか。

④土曜の仏語の授業は、周りで音楽系クラブの練習をしていたり、授業だと知らずに入って来る人がいて、しばしば授業に支障を来している。何らかの対策を立てて欲しい。

⑤実習中に質問を受ける実習があるが、実習が終ってもいても質問の順番を待つために帰らずに待っていなければならない時がある。非常に非効率的であるし、特に女子はそのために帰りが遅くなることは好ましくないので、何とかならないだろうか。

⑥女子クラスは講義前の席の取り合いが激しい。ひどい人は一人で幾つもの席を取ってしまう。このような問題点を、自治会など学生側で話し合い、対策を立てるべき問題であろう。

学生側からは、非常によい意見が出ていたと思われる。また、大学側も積極的に学生から意見を聴取しようとしていた。懇談会の場で即答を望むのは無理があるかもしれないが、大学側の解答は具体的内容に欠けたものが多く、ためで後々明確な解答を示してもらいたいものだ。また今回のような機会に多くの学生の意見が反映されるようになることを望みたいものだ。学生も日常、問題意識を持ってそれを何らかの形で外に表せるような態度が望ましい。

分科問題

分科問題に関し懇談会の記事を書く前に、学内報の内容を要約して掲載したい。

東薬における現行の三学科制は、昭和三十年代後半の高度成長を背景として設置されたものであり、昭和三十九年に製薬学科、翌四十年に衛生薬学科が誕生した。

以来、昭和四十七年の学則改正から授業科目の有機的統一を考慮し、基礎教育の充実、専門科目選択性の拡大、授業科目の細分化、過密化を避けることなどを眼目とし、専門科目を第一、第二に分け、前者を専門基礎と位置づけて一、二年次で修得し、三年進級次に分科することによって科に特徴的な専門科目第二及び選択科目を修得する方式が実施されている。

薬学生にしてみれば、薬剤師の資格を取得することは誰もが期待するところだが、それによって四年間という一ワク内で科目教育の明確な特徴づけには無理があり、東薬における科別教育に対する社会の受け入れもまた、東薬の期待と一致するところとならなかった。

そもそも我が国の薬剤師免許の交付は、他の先進国と比べて甘いところがあり、医療の第一線で活動する責任問題へと関わってくる。つまり、我が国においては、実地研修を義務づけることなしに、薬剤師への道が開かれているのである。しかしながら、現行の薬学部四年間で実施研修を義務づけるには大きな無理があり、そこに薬学教育年限延長論の一つの論拠を見出すことができよう。

東薬では、これらの重要な問題にも取り組むと同時に、「学科」コースの如何にかかわらず薬学共通授業科目は必修とする」という新薬学教育基準にのっとり、学部教育四年間の見直しと充実を図ることによって、この四年間の学部教育を薬学教育の基礎として位置づけることが、今回の「学科」にかかわらない共通コア教育の拡大とその修得の意図である。尚、新カリキュラムの概要は次の通りである。

科にかかわりなく三年間同一教科内容の講義を実施する。実習教育は、四年次まで同一内容のものを実施する。三科への分科は現在在学する学生については四年次進級次に行われる。

実習や授業に対する質疑応答が終わった後に、執行側の要請で突如として問題になった分科問題に対する質問が、わずか四十分ではあった

が、できることになった。

Q1 何の前触れもなく突然に学内報で分科問題が学生側に報道された。学生の意志が全く無視されているではないか。どうしてこのように急な発表となったか。

A1 現在の三分科の制度は、十五年前の社会の要請により作られた。そもそも製薬科は、製薬業に携わっていくプロフェッショナルを養成する科で、必ずしも薬剤師の免許を必要としない科であった。だが、時代が変わるにつれ、薬剤師の免許を必要とする学生が圧倒的となり、割合と国試が通りにくい製薬科が、現在のように不人気となってしまった。また、社会が薬剤師に要請する必要最小限の知識が増えている。その社会の要請が判っていながら、対応できないというのでは、教育者としてたいへん心苦しい。また、薬学審議会でも問題となっている六年制に、安易に踏み切りたくはない。今の四年制の枠内で社会の要請に答えるためには、学内報で報じたように、四年次に分科というこがあるであろう。

Q2 もし、学生全体で四年次分科を否決した場合、学校としては、この分科問題を再検討する意志があるのか。

A2 分科問題は、教授会により決定する教務事項であり、学生の意志の介入する場ではない。分科問題検討委員会は、学長が委員長となり、八王子に移転した時に発足し、去年の十二月より活動を再開してきた。今回の決定は、十分検討された上で提出されたものである。こちら側は善意でやっているので、学生に教授会を信用してもらうしかない。これからも学生によく説明をし、理解を求めていくつもりである。

Q3 理解してくれと言われても、その具体的なカリキュラムが提示されていないので、理解のしようがない。いつ具体的なカリキュラムが提出されるのか。

A3 遅くとも十二月中旬には提出されるであろう。

Q4 十二月中旬では、学生がそのメリットやデメリットを検討し、理解、納得する時間もなく、次の年度に移ってしまう。十分納得のいく前に実行せざるを得ない時期になぜ強行して行なうのか。また、それでは全く学生の自治、学生の大学における存在意味が消失してしまうのではないか。

A4 この会は正式な会ではないので、学内連絡会議で答えるべきなのだが、この四年次分科問題は、善意でやっていることであり、決して学生を苦しめようとするものではない。学校側を信用してもらいたい。

Q5 主旨を学内報で見ると、国試の合格率アップのための四年時分科が伺えるのだが。

A5 決して国試のための分科ではない。

以上のように十日の説明会と全く同じことを繰り返すばかりであった。その原因としては、具体的な問題が未解決のため、抽象的な方法論になりがちであったからだと思われる。早急の具体的案を提示されたい。

この問題に関しては、充分な話し合いをもたないと、納得を得ることはできないであろう。また、近々行なわれるであろう学内連絡会議における学生の代表として、学生の執行側の行動に期待する。

感想

今回の懇談会は非公式な会ではありましたが、非常に我々学生に密着した内容で、しかも高密度だったと思われたので、号外として報道することにしました。一学生として出席した我々の感想を書いてみたいと思います。

大学側には、一般的な教務の問題に関しては、学生から意見を聴取しようという意志がみられ、問題である科目を学生から出してほしいと要請があり、学生と出席した人は、いろいろと準備をしてきたようで、なかなか良い質問や要請が出されていた。また、問題のある科目に関しても、遠慮なく出され、ある科目は教授名まで出された。この会のために、三年のあるクラスは、アンケートをとったりするなど、学生も積極的であったと思う。懇談会はシビアな内容にもかかわらず、穏やかに進行した。但し、非公式な会であり、又、即答が難しい問題も多かったせいもあるが、大学側の解答は具体性に欠けるものも多々あり、また、「教授に要請する」や「検討中である」との解答に関しても、要請あるいは検討したあとの解答、または事後報告をするという約束はなく、その部分は学生にとって未知となってしまう可能性がある。よって分科問題のことも含めて、多少の不安が残った。また、二年の教育環境の悪化に関しても、「現状は長くは思われない」や「教室にはいれない」などの環境改善に消極的な解答で、現在の一、二年の状況に対する対策はなく、首をかしげざるを得ない。

分科問題には、学生側は納得がいかない、の空まわりで議論も抽象的となり、感情的になる人も出て、大学側で学生の意見を聴く程度に終わった。前述した通り、分科後の新制度に対して細かい内容までは、決定したわけでは学生側も具体的なことを何も知らされていないので、充分に話の出来る状態でなかった。また、確かに教授は教学に関してエキスパートであり、社会の事情も我々よりも把握している以上、教務に関しては教務会に負うところが非常に大きいと思われるが、決定の全権をもち、学生の意見のはいる余地がないとの発言も、疑問を感じる所である。逆に教務問題の話し合いのときに、学生から、大学教授は唯一、免許を持たない教育者であるのだから、授業の方法などをもっと積極的に研究してほしいなどの意見も出たが、そのとおりではないかと思った次第である。

編集後記

急なことだったので、構成も考えず、ただ早く出そうと必死で書き上げましたので、不備も多いと思いますが、お許し下さい。内容は、なるべく懇談会に忠実に再現したつもりですが、書き落とし、書きすぎも多少あるかと思っています。その責任に対しては、すべて私にあります。なので何なりとおっしゃってください。また、今後も何か大事なことがあったときには、なるべく早く確実に伝える努力をいたします。皆さんの多数のご意見をお待ちしております。

※本日 分科に関する学内連絡会議が5時より図書館棟第一会議室にて行なわれます。傍聴したい方はどうぞ!!